

共感と感情コミュニケーション (II)

—共感の現象論—

Empathy and Feeling Communication (II) :

Phenomena of empathizing

福 田 正 治

要 旨

共感を広く他者の感情を知り、それに対処する能力と捉えるならば、他者の感情に対応して自己の中に喚起される感情は、必ずしも苦しみや悲しみのような類似の感情とはかぎらない。感情の多様性に対応して喚起される共感も多様性を持ち、時には嫉妬や妬みのような不合理的な行動に結びつくものもある。共感の多様性と、共感を喚起する要因として平等性と団結力、共感を喪失させる要因として自由、恐怖と怒り、感情労働などについて議論する。

1. はじめに

共感人間が社会の中で生きていくための必須の機能で、これがなければ、人と人との感情コミュニケーションは不可能となり、一方通行や独りよがりの会話しかできないことになる。このことが積もり重なると不登校や引きこもりなどの問題行動を起こす⁽¹⁾。しかし、別の場面では、他人の感情を知ったとしても自分の損得を計算して、共感に伴う援助行動をとらない人がいる。人が苦しんでいるのに、影で笑っていたり、苦痛を訴えているにもかかわらず暴力を続けている人がいる。必ずしもすべての人が助け合うような共感を伴うとは限らない。

多くの場合、共感他者を援助する向社会的行動を伴い、反社会的行動を伴うことは少ない。共感他人に与える痛みを止め、他人の心を傷つけるのを止めるなどの暴力停止の強力な力である。だからわれわれは他人が信頼でき安心で安全な社会生活を送ることができる。世界中のほとんどの人は苦しみを示している人に対して援助行動を起こす傾向を持っている。しかし共感を議論する場合、共感の中に道徳的価値を暗黙に持ち込み、感情の多様性を見ようとはしない傾向がある⁽²⁾。苦しんでいる人に共感し助けたいという気持ちは多くの人に感動を与えているが、反対の不合理な感情を起こす人の行動は小説や映画の話題を提供している。この論文ではこれら二つの問題について考える。

2. 共感の多様性

共感の両義性

empathy (共感) という言葉が比較的新しいというのは前著で議論した⁽³⁾。その中で共感単に哺乳類に備わった推測の能力の一部であり、予測する感情の種類によらない中性的な機能であるとの考え方を指摘した。単に苦しみや悲しみに対する援助行動を喚起する共感だけでなく、現実には物価が高くなれば共感的怒りが国民の間に広がるであろうし、無差別殺人が起こればそこに共感的恐怖の輪が広がってくるであろう。身の回りをみれば特定の感情だけでなく、あらゆる感情に関して人々と共感することができる。たとえそれは憎しみであっても共感することができる。ここから共感を価値に束縛されない単なる能力と捉えることができる。

しかしもう一方の考え方で人間の善なる立場を主張する人々は共感という言葉の中に、ヒトという種の利他性を圧縮し、人と人が助け合う道徳的価値の基本を挿入させている。相手の苦しみ姿に共感し援助の手を差し伸べるといふ人共通の遺伝子の姿をその中に見ることができる。しかし共感の現実の動態を眺めると、共感の利他的行動の基本として成り立つためには条件付きといふことができる。その一つは利害関係であり、両者の利害関係が一掃されて初めて向社会的行動が成り立つ。また集団の利益が個人の利益や美德に優先されない状況においてのみ成立することになる。

このことは共感機能が普遍的であるかもしれないが、現われ方には時代の制約、状況依存的な部分がある。現に世界、地域、歴史を通じて弱者への援助、慈善の気持ちは共有され長期にわたって持続してきたが、現われ方は宗教、生産性、社会制度によって制約されていた⁽⁴⁾。

このような利他的行動と利己的行動の両方の喚起に関連する共感を一つの言葉で表す術を筆者は持ち合わせていないし、二種類の言葉で表しても反対の現象をすぐに見つけ出すことができる。合理的な共感と不合理的な共感、適応的な共感と非適応的な共感、共生的共感と非共生的共感など様々な表現があるが、どれ一つとして包含した概念を表すことはできない。一般の社会で通用する共感も、反社会的集団、異常状態の集団に見られる共感も共に人間の能力の一つの現れにしか過ぎないMind-Reading (読心) と考えるほうが共感の理解を深めることにつながると思われる。

不合理な共感

共感とは、環境との感情コミュニケーションの能力の一種であり、対象は単に人間だけでなく、拡大すれば自然の対象物にも擬似的な感情的コミュニケーションが可能である⁽⁵⁾。しかし人間が社会生活を営む中では、対人関係における共感が中心となり、その中でも苦しみや悲しみに対する感情コミュニケーションが主題となっている。人と人との絆を強め助け合う気持ちを共有することは集団を維持する強力な武器である。しかし感情には苦しみや悲しみだけでなく多様な種類が存在し、その分類も複雑になっている^(6,7)。その中で人は他人の意図や感情に対して素直に反

応するだけでなく、時に反対の反応をすることがある。たとえば相手の喜びに対して、嫉妬 (jealousy) や悪意のある妬み (malicious envy)、極端には憎しみなど状況適合的でない不合理な感情を引き起こすことがある。友達がスポーツの競技で優勝したとき、また校内テストで1位になったとき、ある人は友達に喜びに手を取り合っ、その栄誉を分かち合うことができるが、ライバルであれば、心の中でうらやましき、または妬みをもつことがあるのではなからうか。または自分には関係ない、住む世界が違うこととして相手の喜びを無視する人もいるであろう。しかしこれを表情に表わすことは社会規範に反するとして避けられているが、小説や映画などでは詳細に語られている。

図1は、そのことまでを含めた共感プロセスに関する図で、別著⁽³⁾で論じた共感プロセスを土台にしている。苦しみや悲しみを覚えているのに出くわしたとき、それを見た人には、視覚や聴覚の感覚刺激を通して他人の表情や動作を認識するが、悲しみや苦しみといった感情の情報処理過程では、自分が感じる時に使われる苦しみや悲しみの神経回路がそのまま他人の感情認知に兼用されている⁽⁸⁾。他人の感情が、さも自分の感情として直接表出されるとき、これは情動伝播 (contagion) として知られている現象となる。また模倣 (contagion) として幼児などの連鎖的な泣きにみられる。これらの共感情動共感の特性を有し、自動的かつ無意識的に起こることが多い⁽⁹⁾。

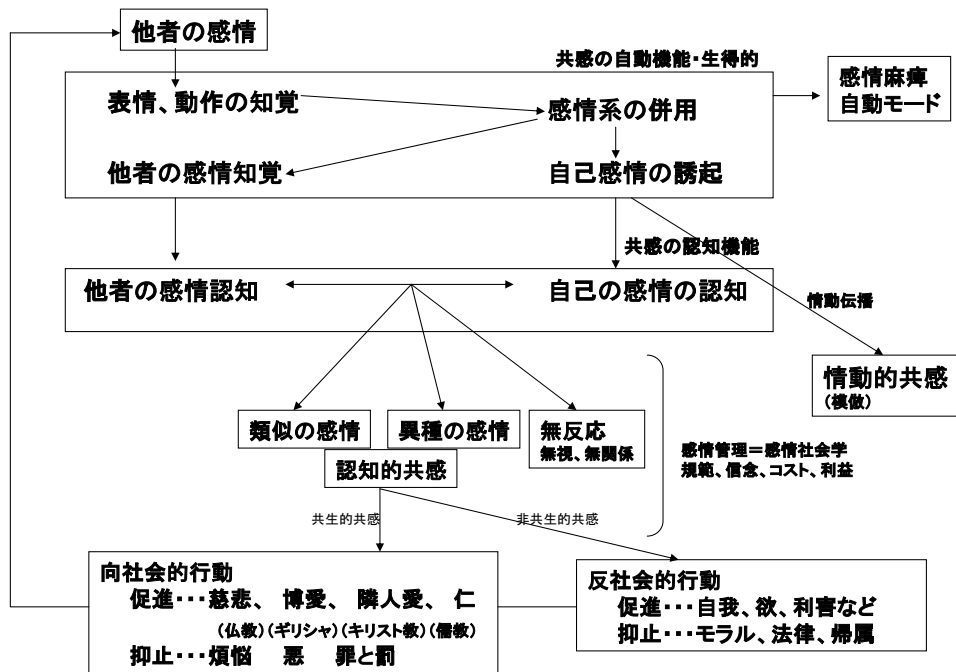


図1. 多様な共感プロセス

しかし現実には起きている共感はまだ少し複雑で、他者のおかれた状況、また自己の信念、規範や利益等を考慮して共感行動が起こる。援助しようとする感情は、他者の感情と類似の感情が自己の中に喚起され、それを減弱させようとして向社会的行動が表れる。悲しみや苦しみに対する共感や喜びに対する共感などは日常生活で頻繁に出くわしている。大災害のとき被災者に対する恐怖の共感もまた共有することができる。

これらの共感とは他者との類似の感情が現われているという通常の共感に関する議論であるが、必ずしも類似の感情があらゆる場合に起こるとは限らない。他人の喜びが妬みや憎しみとなるかもしれない。他人の恐怖を喜ぶ人や、悲しみや苦しみを喜ぶ人がいるかもしれない。また犯罪においては共感的怒りが起こり、極端な場合には犯人との共感も起こりうる。これらは対象者と異なる感情の喚起であり、一部他者の不幸を喜ぶというシャードンフロイデ (Shardenfreide) として心理学で知られている⁽¹⁰⁾。この異種の不合理な感情の喚起は、広い意味での他人の心を知った上での反応で、その意味で共感と同一機能となる。多くの場合、この異種の感情は行動的に反社会的行動につながることが多い。

また、われわれは共感プロセスの神経回路を遮断する特性も持っている。頻繁に他人が苦しんでいるのに遭遇したとき、そのような感情に麻痺し、無視することや自動操縦モード⁽²⁾になって対処することがある。また他者の感情の認知までは生じるが、最終的には無関係とか無反応として処理されることが起きている。職場での繰り返しの感情の過多の暴露は慣れを生じ、自動操縦モードになったり、日常での考えることの放棄が無意識の他人に対するいたわりを少なくしていることもある。日常生活ではテレビを通して世界中からの情報が氾濫している。その中には不幸な出来事、戦争や災害などの映像が垂れ流しに近い状態で繰り返し過度に放映されている。中に映っている当事者の表情を通して、彼らがどのような状態にあるかは理解できるが、それに対する対処となると無視や無反応が多くを占め、もし世界のさまざまな出来事に逐次一喜一憂しては自分の生活が成り立たず共感疲労 (fatigue) や共感抑制 (inhibition)、共感遮断 (deprivation) に陥ってしまう。われわれは情報のもつ意味を取捨選択し、感性の程度の違いはあるものの、日常性の中に情報が有する内容性が埋没するのが常である。この情報のもつ距離の関数性が情報化社会の負の要素として冷然と横たわり世界に人々との共感を妨げている。

このように他者との感情コミュニケーションとは、他者の感情に対して類似の感情、異種の感情、そして無反応の3種類が最終的に出てくるものであって、現象論的にはこれらを総合したものが共感の中に含まれていることを考えておかなければならない。

3. 共感の原動力

前著⁽³⁾で共感の発生の進化論的根拠について、集団形成の必要条件から説明した。ヒトが集団を作り複雑な人間関係を形成し、その中で生きていくためには、天文学的な数の人間関係を考慮し行動方略を決定しなければならない。考慮とは、自分を中心とした人間関係、および第三者同士の人間関係に関係している他者の心を推定し行動を予測することであり、これには進化的に備

わった共感能力が不可欠である。

しかし集団の必要性からなぜ共感能力が進化的に生き残ったのか、もう少し社会科学に根ざした理由、特に集団の中で、どのような特性が共感能力を進化し強化させてきたのかを考える必要がある。ここでは共感を形成する原動力と共感形成を妨げる力のいくつかについて議論するが、これら2つの力は両刃の剣でどちらにでも作用することは最初に述べておかなければならない。

平 等

ヒトが本来的に平等であるか、不平等であるかは、哲学の問題であり、科学的に証明することは不可能で、思弁的にどちらの結論を導き出しても、他方から非難される。

ルソー-Rousseau は、人間は本来、平等だとして、不平等の問題を指摘した⁽¹¹⁾。ヒトがアフリカのサバンナに二足で立ったとき、おそらく採集と狩猟生活が基本であり、そこでは協同での獲物の狩りや猛獣からの防衛が必須であった。人は他の肉食獣と比べて走るのも遅く、力も弱く、単独でこれらを行うことは不可能であった。それをヒトは道具と知恵でカバーし、また家族単位、少し大きくなって血縁単位の集団という知恵で対処しなければ生き残ることができなかった⁽¹²⁾。そこでは狩りでの役割、危険の負担度から、食料の分配の平等性が担保され、それが数100万年にわたって維持され、ヒトの基本的性質となった。

それが1万年前ほどから農耕が始まるにつれて、余剰産物の保存、それに伴う私的所有が起り、それに関連する不平等が発生してきた⁽¹³⁾。人はこの富をめぐる、恨みやねたみを持つために、さまざまな戦争が起り集団は時に絶滅に追いやられた。不平等が極端になってくると人は本来平等であることが思い起こされ、富の社会的分配制度が創られ極端な不平等は避けられるようになった。これらはフランスの「自由・平等・博愛」の精神に強い影響を与え、それが今日の世界政治の原点となり、また基本的人権の原則となっている

一方、動物行動の生態学からは逆の不平等の原則から出発し、同じ結論である平等にたどり着いた。この場合の平等とは個体間ではなく群れ間の平等である。

進化論は、生物が厳しい環境の中で如何に適応して生き残っていくかの原則であり、ある点では常に不平等を中に含んでいる。個体は環境の中で生き残るために独自の遺伝子変異を通して適応性を獲得していったのであり、それは歴然とした他の個体との差別化であった。しかしある動物は群れを作って生き残るというメリットを見つけ、地球上の哺乳類の多くは群れで生活を営んでいる。複数の個体が共に生き残るためには、そこに社会的仕組みが用意されなければならない。その社会的仕組みの一つは、母系、または父系の階層社会で力が支配する社会である。群れを構成するメリットはデメリットより大きく⁽¹⁴⁾、それが少なくとも霊長類初期の何千万年間続いてきた。性や年齢による力の差はその中に包含され、ヒトが文明を持つまで続いてきている。群れを維持するためには、群れ内の不平等は持続され、今日の動物の社会を形成している。特に群れと群れとの対立には厳しいものがあり、群れを維持するためには群れ内での平等の選択はありえなかった。しかし群れと群れの対立の中には共存共栄があり、環境が許す限りテリトリーの住み

分けがあり、ヒトと異なり無限の欲求は生じてこなかった。集団の規模、集団力に差があるとしても、他集団間の限られた平等は種の維持に不可欠であった。

ここで問題は、不平等から平等へのヒトの特性の基盤は何かということである。他者の心を読む能力である共感はこの特性の大きな要因になっている。ヒトは不平等に耐え切れない動物であり、常に平等を目指す動物である。不平等を形づくる能力の基本は欲と報酬性の機能であり、これは動物が地球上に現われたときからすでに獲得していた能力である⁽¹⁵⁾。しかし前にも議論したように共感進化の途中から出現してきたものである。不平等は痛みを伴い、他者からの妬みや恨みを伴い、争いの元凶となる。そこに他者の痛みを感じ、苦しみを感じ、それを減弱させようとするようにヒトに共感が備わってきた。

ニホンサルは階層を基本とする社会を構成しているが、ボノボ（ピグミーチンパンジー）は概して平等社会を営んでいる⁽¹⁶⁾。平等を営むためには、それを維持する仕組みが必要で、毛づくろい、性の平等化、食料の豊かさなどが平等を保障している。民俗学からくるとヒトの集団の平等性は、根底に平等を保つための努力が隠されているという⁽¹⁷⁾。怪我による障害や病気などは避けることのできない誰にでも起こることであり、そこに消極的な協力の芽生えがある。共感はその基礎であり、それを担保することによって群れは大きくなってきた。認知的共感視点取得、役割取得という機能がなければ成り立たず、そこには相手と同じ立場に立つという平等の精神がなければならない。

しかし、ここに平等といっても、生産性と能力によって大きな考え方の差が出てくる。現在のように格差社会が拡大していく中で常に議論になるのは、機会の平等か結果の平等かの問題である⁽¹⁸⁾。グローバル化社会の中で日本は結果の平等を選択したがために、経済格差は拡大し、貧富の差が拡大してきている。われわれ人間には、能力において差があるのは当然としても、その差が、環境や教育によって拡大、助長されていくことには問題がある。一方、機会の平等を強調すると、教育の平等化が主張され、硬直化した社会が形成されやすい。この二つの平等が、共感の社会的な機能に微妙に作用し、一般に結果の平等は共感の働きを抑制する方向に働く。現在において、格差を一方では是認する風潮があり、格差を解消する動きは非常に遅い。

このような格差社会でも、欧米にある寄付行為やボランティアの社会的是認が正当化されておれば⁽¹⁹⁾、あらゆる格差社会の解消のバッファが期待できる。日本でも江戸時代は災害で金持ちから冥加金が取られた伝統があるが、今の時代、会社が社会貢献することは少ない⁽²⁰⁾。

団結力

“心を一つにして達成することができました”。このような言葉がスポーツや競技、会社の目標達成などでよく使われている。この中の“心を一つにする”という言葉の中に、仲間や同僚の心を開放し、それを理解するプロセスが含まれている。この相互理解なくしてチームは統一が取れず、勝利には程遠いといわざるを得ない。それに伴う一体感や団結力は個人では達成できない

力を含んでおり、古来戦争ではこの団結力が吹鼓され、個人技は虐げられてきた。

職場でのチームワークは相手の気持ちを察し、奮起なくしては達成できないものである。教育の現場での運動会のクラス対抗などはこれを有効に利用している。その遺伝子的記憶を過去から現代に至るまで人は大いに利用してきた。しかしこの団結力も、考えの一致する、または目標が一致する仲間には有効であるが、組織の中に必ずといっていいほど存在する意見の異なった個人に対しては、異種の感情を誘発し、団結力の反作用を引き起こす。また利己主義や独善、専制などもまた団結力を弱めるものである。そこに集団からの排除や差別が起こり悲惨な結果を生むことがある。また共感の強化とは逆の共感の喪失が起こる。

しかし共感が団結力を強化し、団結力がさらに相互理解を促し、集団が生き延びてきた確率は高いものがある。単体だけでは環境変化に耐え切れない存在が、集団を形成することによって、今日まで生き残ってきた。集団を形成するためには構成員の相互関係の把握と理解、相互コミュニケーションが不可欠である。その能力の基本が Mind-Reading で共感の基礎を形成している。

4. 共感の喪失

これまで、どのような因子が共感を強化しているかに重点を置いて議論を進めてきた。しかし世界を眺めれば、悲惨な事件や戦争は止まるどころなく続いている。むしろ情報化や科学技術の進歩により戦争は世界的に拡大していつている気配さえある。過去100年の歴史を見ても、第1次世界大戦、第2次世界大戦を経験して、その反省の上に世界連合という組織を作り、世界は恒久平和を誓ったにもかかわらず、カンボジア、ルワンダ、旧ユーゴスラビアなどで繰り返された大量虐殺を世界は止められないで来た。

そこには異文化の、異民族の、異人種の人々との超えることのできない共感の断絶が起こっている。一個人として有している共感が、集団になると全く機能しなくなるということは、共感の持つ重要な特性なのだろうか。ナチスドイツの一将官は家庭では良い父親であったが、職業的には冷酷にも多数のユダヤ人を死に追いやる決定を下していた。生物として有している共感機能と、集団を維持発展させてきた共感機能が、どこか外れている気がしないでもない。

傲慢さ

デカルトはすでに憐れみの限界について議論している⁽²¹⁾。その中で「まったく憐れみを感じえない者は、すべての人間に対して生来憎みをもち、悪意とねたみにみちている人々、あるいはまた非常に無感覚であり、かつ善い運によって盲目にされているか、悪しき運によって絶望させられているために、いかなる悪もはや自分には起こりえないと考えている人々」であると、当時にも恐らく非道な人々が存在し苦しみがあったに違いない。また高邁な人々が持つ憐れみもまた今日でいう共感とは少し異なる。「最も高邁で最も強い精神を持つ人々、したがって自分に対してはいかなる悪を受けることも心配せず、偶然の運の支配をこえてでてくる」人々は「だれに対しても善意を持つことが、高邁の心の一部である」と考え、同情を示す。そこに自信に満ちた

傲慢さを持つ人々の影を見ることが出来る。うがった見方をすれば、寄付の慈善行為はその片鱗を示しているのかもしれない。

恐怖・怒り

共感の真価が問われてくるのは、生存に火急の危機が起こった場合である。死という恐怖の前に、歴史が示すところの人間の行動は、多くの沈黙と、裏切りとわずかの殉死である⁽²²⁾。共感はその沈黙の中に隠れて運命の時を待つ人々の中にあるが、一方の人を助けるという共感もまた表に現れ、過去では宗教がその役割の一部を行っていた。

しかし生存という基本的欲求が満たされない貧困、持てる者と持たない者の格差、多くの人の無関心などが、その解決方法を模索していく中で、責任転嫁などの展開から、ある種の共感機能の喪失を起こしている。先の見えない、希望が持てない社会で、貧困は人間性と理性を蝕んでいく⁽¹⁸⁾。そしてその怒りと不安、恐怖が社会一般に向けられたとき、無差別な暴力が発生する。日本でも、格差社会が未来の見えない希望のない社会として若者に写ったとき、無差別殺人が起こることは証明済みである。そこには被害者への配慮や共感は無塵もない。

安全に対する危惧もまた共感を削ぐものである。安全が脅かされたとき、多くの人はパニックに陥り判断機能の喪失を起こす。自分の身を守ることは本能であり、とっさの防御や反撃は脳の深いところから反射的に起こってくる。自己防衛はアメリカではたとえ人を殺す反撃に出たとしても許容の範囲にあると考えられている。国家が侵略または攻められるという安全に対する恐怖の前には、これまで獲得してきた自由を簡単に手放し、理性を無力化し、逆の意味での一体感が国民の間に広がる。狂気もまた共感され、狂気の伝播は急速に広がる。その中では他国への共感はずみられず、排除が主役を占め戦争が閉塞感の解決策となる国民的視野狭窄に陥るのは歴史の示すところである⁽⁴⁾。

戦争の心理学の示すところによれば、生死にかかわる兵士や警察官などが死の恐怖に立ち向かって行動しなければならぬとき、周辺視野の喪失、認知処理能力の低下、選択的聴覚抑制などの感覚異常が報告されている⁽²³⁻²⁵⁾。その中では決して相手に対する共感が取り上げられることはない。

自由

自由がなぜ共感と関係しているかを考えるのがこの節の主題である。自由とは何かをここで応えることは主題の範囲を超え、哲学にその席を譲ることとして、現在の社会で起こっている自由の捉え方の中に、世界のあらゆる人間との間の共感を妨げる要素がある⁽²⁵⁾。

自由はわれわれが生きていく上での基本的人権として多くの国で認められている。思想、宗教、学問、職業、住居の自由と数え上げれば切りがない程で、これらはすべて人間が歴史の中で、先人の多くの命の代償によって勝ち取ってきた権利である。

自由という命題は民主主義と一体となって政治的に一つの価値体系になっている。20世紀に行

われた平等に対する壮大な試行錯誤は失敗に終わり、21世紀は自由が看板になっている。そしてその価値を世界の基準として地球上のすべての人々に押し付けようとする独善的な世界政治が横行し、世界の至るところで摩擦が起こっている。自由の内容の精査もなく漠然と自由の価値観を押し付けているところに問題がある。

しかしここで考える自由は経済における自由、グローバル化社会における自由の問題である。先進諸国における経済的富は幸福と豊かさを創出している。生活における豊かさは人間全てが求める欲求であるが、それが資本=お金に結びつき、豊かさにおける自由とはお金を稼ぐ自由であり、そこに無秩序な競争社会、階級社会、格差社会がある。豊かさの中には、名誉とセックスも含まれ、日本を含む西洋文明社会は混沌の中に展開されている⁽²⁷⁾。

空洞化した産業社会では、それよりもマネーゲームといわれる労働を伴わない富の集積、移動が起こっている。そこに拝金主義がはびこり、数千年かけて育ててきた人間社会のモラルは有効性を失いかけてきている。その中に、他者に対する想像力に衰退、強いては共感の阻害、共感的配慮の減弱という共感の持ちにくい社会が見られている。そしてこれまで身内としてみてきた家族、血縁関係の絆が切れていく現実がある。

格差社会における差別意識の助長は単一社会を構成する上では危険な兆候である。歴史は差別社会を乗り越えようとして平等の権利を成長させてきたが、自由という錦の御旗の前に後退を余儀なくされている。そして社会的強化という機能もまた減弱していつている。少年によるホームレスビールの襲撃、無差別殺戮の増加、非正規労働者の固定化の是認など、新たな差別化が動き始め、共感の対象の限定化、さらには共感の断絶が起こってきている危惧をみる。これらがさらに世界的に起こり、低開発国の固定化、差別化が自由という旗の下で進行している。

感情管理

人間の支配の歴史は、当然のことながら集団を構成するという動物の特性から起こってきた。原始的には、身体的制限で支配するという形態をとり、後に政治体制が確立するに従って、思想もまた管理の対象になった。思想は目に見えないものであるが、それが言葉や行動に現れたとき、身体的制約を伴った形として管理されるものとなった。エジプトでは王は太陽神の現人神としてあがめられ、民衆は祭祀を営む中で大部分の生活時間と身体を提供を求められた。

産業革命以降、民衆は労働者として身体制限を伴う生活時間を切り売りして生活の糧を得ていた。しかし、その間、労働者は何を考え、何を感じるかの思想的自由があった。管理者は労働者を通して生産が規定どおり実行されれば、労働者の質は問わなかった。その基本精神が、憲法で保障された思想と宗教の自由であり多くの国で保障されている。

しかし身体的拘束が人間の考え方に影響を及ぼすことは、生理学の視点からも社会学の視点からも指摘できる。生理学的視点では、特にストレスと対処の仕方の問題で、身体的ストレスが大きくなれば、積極的な生活態度が減弱し、従属的な考えが主流を占めてくるようになる。感情労働とは「相手に共感し、相手を受容し、相手の願望の実現を意向とする過程でなされる労働」

で⁽²⁸⁾、まさしく現代のサービス産業の多くはこの感情労働が求められている。労働者は心的ストレスを減少させようとして、自分の考えを会社の方針に合わせ、結果としては会社人間に変質していく。しかし表面上は自己の主体性によって変容したのであり、会社が強要したことではないとして、思想の自由は犯されていないとしている。

感情社会学は、これまでの社会学の労働管理、時間管理、生産管理、人員管理などの生産における労働者の身体的、かつ物理的管理に焦点を当てていたことから、労働者の感情表出にまで関与することになってきた社会現象に焦点を当てた学問である⁽²⁹⁻³²⁾。会社にとって重要なのは労働者の内面性ではなく、お客と接する外面に現われた態度だけで労働者の感情もまた商品となることである。労働者が何を考え感じようが関係がなく、マニュアル通りに、お客と笑顔で接してサービスを提供してくれればよいのであって、それがサービス産業では重要であることを主張する。親切、誠意、笑顔などは不特定の人を対象とすることができる。そして「感情労働を行う人は自分の感情を誘発したり抑圧したりしながら、相手の中に適切な精神状態—この場合は、懇親的で安全な場所でもてなしを受けているという感覚—を作り出すために、自分の外見を維持しなければならない」⁽²⁹⁾。自己改造セミナーとか社内研修の風景はその典型的な例であり、社会学的には、会社への感謝や忠誠を要求することになる。現代の社会は労働者の単純労働だけでは会社を維持することは不可能で、会社は、その人の創造力までも買取り支配するようになった。技術開発の現場はそれでしか採用されない。

それぞれのサービス部門にはある決まった感情規則がある。共通しているのは、笑顔であり、丁寧な言葉遣い、挨拶の仕方の決まりなど、お客に不快な印象を与えない規則がマニュアル化されている。それにしたがって、外面上の感情表出は管理され、労働者は感情ワークが求められる。感情ワークとは、自分の意に反して笑顔を作らなければならない労働者の行為である。時には体の調子が悪いかもしれないし、前の日に友人と喧嘩したかもしれない。それでも会社では、不愉快なお客に笑顔を振り回さなければならないとしたら、どのように労働者は感じるだろうか。ホックシールド Hocshield は表層演技と深層演技に分けて論じている。表層演技とは、“ふり”をするに代表される演技でその場を乗り切ることである。労働者は自分の感情をコントロールしながら、相手の中に親切なもてなしを受けているという感覚を作り出さなければならない。深層演技とは自分の底からこの仕事が好きであると思うようになることである。その時間だけ我慢すればよいとか、これが仕事だからといって役者が舞台上で役を演じるような一時的なごまかしは許されず性格の変容が求められる。個人にとって、仕事にポジティブな点や生きがい認められ、人生の目的と一致しておれば、感情規則から感情ワークまでは合理性を持って受け入れることができる。しかしもし単にお金を得るための労働であった場合、感情ワークの深層演技は何をもたらずであろうか。

長期の感情労働は当然のことながら、感情の捉え方にも影響を及ぼしてくる。「私はしっかりしているから影響されない」とは、身体を有している存在にとって非常に難しい。また自分の会社が要求するような人間に自主的に変容していく姿もある。以前は、身体的管理、つまり束縛だ

けが問題になっていたが、現代は間接的手段を通して感情までもが制御される時代になってきている。感情を完全に商品化することは難しい。そこでは本当の自分が何であるかの葛藤が起り、生きがいが見つけられなければ、完全な切り離しが起り、二重生活にならざるを得なくなる。この偽りの自分に気づくことなく変容していくとしたらそれは感情麻痺的な適応である。現象として、ここに共感麻痺、共感疲労を指摘しなければならない。演技上の共感を四六時中、客に振りまいておれば、何が起ってくるかは自明のように思われる。自己防衛として、実像としての自己と虚像としての自己のギャップが大きくなり、自分の心を閉ざさなければなくなる。感情社会学はこの点を鋭く指摘している。と同時にこの問題に対してどのように対処したらよいのかの答えも要求されているが、その点は明らかでない。

5. まとめ

日本では地域コミュニケーションが失われたと指摘されて久しい。その中に含まれていたものは隣人との思いやり、ふれあい、相互互恵であった。一つの地域生命体として、構成員の感じ方の共有があった。人は常に隣人が今何を考え、何を感じているかの気配りをしながら地域と共に生活を営んでいた。

経済に伴う豊かさの追求は短い時間でこれらを吹き飛ばし、能力主義を標榜していた人を自由の中に解放した。そして富を得た代わりに失う代償も大きかった。

人間の共感能力は基本的に失われていない。共感能力は長い進化の中で獲得してきたもので脳の中にしっかりと書き込まれている。ただ人が成長していく中の家庭、学校、社会での養育、教育、文化などによって強まりも弱くなることが起こる。共感が機能するためには、信頼とそれに基づく双方向のコミュニケーションが保証されなければならない。

その影響因子のいくつかをここで議論した。共感能力を強化する因子として平等と団結力、減弱させる因子として恐怖と怒り、自由、感情労働などを取り上げた。文化の中に含まれるさまざまな因子が複雑に絡み合い、支配、法、道徳、博愛、友愛、戦争など日常生活のあらゆる動態の中に、これら両方の因子が含まれている。特に集団を構成している個人と個人との共感と、集団と異なる集団との間の関係性の複雑さが共感の理解を難しくしている。つまり異なる集団の間の個人間の共感の持ち方の難しさがある。

感情の種類は多種多様であり言葉で区別が可能とすれば数千に及ぶであろう。そのすべてを人間は感じることができる。それがたとえ身を滅ぼす感情であっても、芸術はそれを尊重する。共感はいらと連動して多種多様でここで議論した共感の表裏を映し出している。これらを踏まえながら共に感じるということの「共に」の再考が必要である。未来は常に不透明であり、20世紀に人間が共に見た無限の希望や夢は21世紀では持続可能という制限付きの繁栄に変わろうとしている。これから見る希望が世界のあらゆる人々を含む「共」であるか検討を要する。もし不可能なら制限付きの「現実的な共感」を通した相互理解を求めなければならない⁽²⁵⁾。

文 献

1. 「感情教育」現代のエスプリ 494, 至文堂, 2008.
2. 武井麻子 感情と看護. 医学書院, 2001.
3. 福田正治 共感と感情コミュニケーション (I) —共感の基礎—. 富山大学杉谷キャンパス一般教育紀要, 45-58, 2008.
4. ゲレメク, B. 憐れみと縛り首—ヨーロッパ史のなかの貧民—. 早坂真理訳, 平凡社, 1993.
5. 田丸政男, 戸塚裕久 アニマルセラピー. 金芳堂, 2006.
6. 福田正治 感情を知る—感情学入門—. ナカニシヤ出版, 2003.
7. 福田正治 感じる情動・学ぶ感情—感情学序説—. ナカニシヤ出版, 2006.
8. Chakrabarti, B. and Baron-Cohen, S. Empathizing:neurocognitive developmental mechanisms and individual differences. *Progress in Brain Research*, 156:403-417, 2006.
9. Hoffman, M. *Empathy and Moral Development*. Cambridge University Press, 2000 (菊池章夫, 二宮克美訳, 共感と道徳性の発達心理学. 川島書店, 2001).
10. Saarni, C. *The Development of Emotional Competence*. Gailford Press, 1999 (佐藤香 (監訳), 感情コンペテンスの発達. ナカニシヤ出版, 2005).
11. Rousseau J-J. 人間不平等起源論. 世界の名著30. 小林善彦訳, 中央公論社, 1966.
12. 福田正治 進化的必然としての感情. 富山大学杉谷キャンパス一般教育紀要, 35 : 21-34, 2007.
13. ベルウッド, P. 農耕資源の人類史. 長田俊樹, 佐藤洋一郎監訳, 京都大学出版会, 2008.
14. Futuyma, D.J. *Evolutionary Biology*. Sinauer Association, 1986 (岸由二訳, 進化生物学. 蒼樹書房, 1991).
15. Irvine, W.B. *On Desire. Why we want what we want*. Oxford University Press, 2006 (竹内和世訳, 欲望について. 白揚社, 2007).
16. ドゥヴァール, F. ヒトに最も近い類人猿ボノボ. 藤井留美訳, 阪急コミュニケーションズ, 2000. 17. 寺島秀明編 平等と不平等をめぐる人類学的研究. ナカニシヤ出版, 2004.
17. 木島賢 格差社会の人間論. 東海大学出版会, 2008.
19. 久保純一, 岡沢憲夫(編) 世界の福祉. その理念と具体化. 早稲田大学出版部, 2001.
20. 志賀登 江戸の助け合い. つくばね舎, 2004.
21. Descartes, R. 情念論. 野田又夫訳, 世界の名著22, 中央公論社, 1967.
22. Delumeau, J. 恐怖心の歴史 (永見文雄, 西沢文昭訳). 新評論, 1997.
23. Grossman, D., Christensen, L.W. *On Combat. The Psychology and Physiology of Deadly Conflict in War and in Pease*. International, Armonk, New York, 2004 (安原和見訳, 「戦争」の心理学. 二見書房, 2008).
24. アサド, T. 自爆テロ. 田真司訳, 青土社, 2008.
25. Moghaddam, F.M., Marsella, A.J. *Understanding Terrorism. Psychological Roots, Consequences, and Interventions*. American Pyschological Association, 2003 (釘原直樹 (監訳), テロリズムを理解する —社会心理学からのアプローチ—. ナカニシヤ出版, 2008).
26. 橋木俊昭, 刈谷剛彦, 齋藤貴男, 佐藤俊樹 封印される不平等. 東洋経済新聞社, 2004.
27. パーススタイン, W. 「豊かさ」の誕生. 徳川家広訳, 日本経済新聞社, 2006.
28. 長谷川公一, 浜日出夫, 藤村正之, 町村敬志 社会学. 有斐閣, 2007.
29. Hochschild,A.R. *The Managed Heart: Commercialization of Human Feeling*. Univerisity of California Press, 1983 (石川准, 室伏亜希 (訳), 管理される心. 感情が商品になるとき. 世界思想社,

- 2000).
30. Smith, P. The Emotional Labour of Nursing. (武井麻子, 前田泰樹 (訳) 感情労働としての看護. ゆるみ出版, 2000).
 31. 崎山治男: 「心の時代」と自己. 感情社会学の視座. 勁草書房, 2005.
 32. 船津衛編 感情社会学の展開. 北樹出版, 2006.